

流域治水の文化

温暖化豪雨対策としての流域治水の制度化が進みました。生物多様性や人間生活の質についての社会の考え方も変わりつつあります。流域治水は集水域である地域の全体が水の健全な循環に適したかたちになるための制度化とみなすことができます。

これまで日本の近代治水事業は川をいわば“水を運ぶ容器”とみなし、その大きさや流れやすさをもっぱら追求めてきました。しかしこれからは、降った雨水を流域のさまざまな土地にとどまらせたり浸み込ませたりすることで、地上からいきなり川に流れ込まないようにしなければなりません。その後晴れた日に地下からゆっくり川にしみ出して、豊かにつづく流れになるようにしなければなりません。川と土地利用は別々に計画管理するやり方から、両者を一体的に捉えるという、これまでも追求してきたのになかなか広がらなかったやり方に、本気で転換しなければなりません。

これまでは、経済効率になじむ数量化の観点から、コンクリートを単純な幾何学のかたちにして使うのが便利でした。もちろん対症療法の必要な場面ではこれからも、便利で強く、“客観的”に扱いやすい材料と形がなくなることはないでしょう。しかしこれからは土や石やその上の植物の、複雑でありながら秩序ある自然のかたちにならうことが、これまで以上に、一部ではなく全体に、求められるようになるでしょう。特定の専門家が取り組むだけでなく、多様かつ多数の人々の参加が必要になるでしょう。そうすると、全体の共通のヴィジョンとしての、風景の役割りが大きくなることでしょう。

こうした転換には、大別して2つのアプローチが可能と考えられます。一つは水循環の健全化をもとめる流域治水の個別地域のちいさな取り組みが次第にかたちを成し、なんらかのコンフリクトがあればその取り組みのリーダーたちをかこんで、みんなで調整するというので、全体的に望ましい、自然と人間生活が調和した風景が生まれることを期待するアプローチです。もう一つは予め望ましい風景のすがたを専門家たちが描いて、その実現に向けて各部面のステークホルダーの意向を行政が調整して、流域治水を進めていくというアプローチです。あるいはそのほかにも、第三の道があるかもしれません。そうしていずれのアプローチを選ぶかは、流域治水の文化の質を問うことになるでしょう。

本年度前期のシリーズでは文化と自然の関係と多様性の意味を考えました。そこでは文化が、自然の恵みと災いに折り合いをつける人間の営みとその成果であることに光が当てられました。そうして自然とむきあう伝統文化の奥深さを学びました。本シリーズはそれにつらなるかたちで、流域治水の文化を考えてみたいと思います。水に関わる文化としての流域治水を考えてみたいと思います。

景観研究センター所長 山下三平

テーマ：流域治水の文化

■ 10月18日(金) 18:00-19:30

流域治水と雨庭

山下 三平 (九州産業大学 建築都市工学部 教授)

<https://ksu-keikanseminar2024s1.peatix.com/>

■ 11月8日(金) 18:00-19:30

雨をゆっくり流すまちづくり

笹川 みちる (NPO 法人雨水市民の会 理事)

<https://ksu-keikanseminar2024s2.peatix.com/>

■ 12月6日(金) 18:00-19:30

共創の流域治水

島谷 幸宏 (熊本県立大学 地域共創拠点運営機構 機構長、特別教授)

<https://ksu-keikanseminar2024s3.peatix.com/>

会場：対面 九州産業大学 23号館 4階 景観研究センター 景観ライブラリー
Online Zoom ミーティング *各回ともPeatixにてお申し込みください

参加費：無料



photo by Sampo YAMASHITA



photo by Michiru SASAGAWA



photo by Yukihiko SHIMATANI

九州産業大学景観研究センター
景観セミナー／レクチャーシリーズ
2024 後期